# INFORMATION

## 寺子屋トーク　花まつりの日に「仏に会う」立松和平さんの寺子屋トーク

第31回の寺子屋トークは、4月7日に開催します。

今回は、天王寺区仏教青年会との共催、同会が毎年行う「花まつりフェスティバル」として実施します。

講師は作家の立松和平さん。国内外を問わず各地を旺盛に旅する行動派作家として知られる立松さんですが、仏教への造詣も深く、『仏弟子ものがたり』、『ブッダその人へ』など、仏教に関する著書も多数記しておられます。「仏に会う」と題した今回の講演でも、多くの気づきを与えてくださることでしょう。



今回、チラシを同封しましたが、寺町倶楽部会員の方は、20名までは優先的に受付（倶楽部事務局：06－6771－7641）します。但し、20名を超える場合には、チラシに記載の天王寺区仏教青年会事務局（称念寺内：06－6772－3737）までお申し込みください。

【第31回寺子屋トーク】
◆日　時：4月7日（日）
　13時～14時30分
◆講　師：立松和平さん
◆会　場：應典院
◆参加費：無料
◆定　員：200名

## いのちと出会う会

生きること、老いること、病すること、そして死についてじっくり仲間と語り合う、そんな集いが「いのちと出会う会」です。

毎月第3木曜に開催しています。どなたでも参加できます。ぜひあなたもいらしてください。

●

第16回　2月21日（木）
「平成版・看病用心鈔を語る」

話題提供者
浄土宗安福寺僧侶　大崎信久さん

鎌倉時代に、浄土宗の僧・良忠上人によって書かれた「往生」の手引き「看病用心鈔」。中世から伝わる病者と看病人の心得は、今日の医療と介護が見逃してはならない点に光を当てています。「お寺の出前の会」で活躍する若手僧侶が熱く語ります。

◆　◆

◎時　間：午後6時30分～
◎参加費：800円（お茶菓つき）
◎会　場：應典院
お申し込みは事務局まで。

## 【新入会員ご紹介】

（2002年2月18日まで）

前号発行以降にご入会いただいた方々です。ありがとうございました。

○一般会員
【大阪府】
竹村安子　大阪市福島区
扇谷元長　富田林市
斎藤敏子　大阪市中央区
【千葉県】
神　仁　香取郡

○個人会員
【大阪府】
得本嘉和　大阪市北区
筒井美佐子　大阪市西区
森　恵子　大阪市鶴見区
中川　修　寝屋川市
【京都府】
川上　哲　相楽郡
【兵庫県】
中山恵三　尼崎市
【奈良県】
横井照典　北葛城郡

○学生会員
【大阪府】
大池容子　大阪市東住吉区

サリュ　VOL. 30
應典院寺町倶楽部のニューズレター

発行日　2002年2月20日（偶数月発行）
編集人　池野亮、大塚郁子、川井田祥子
発行所　應典院寺町倶楽部
〒543－0076
大阪市天王寺区下寺町1－1－27
TEL06－6771－7641
FAX06－6770－3147



應典院寺町倶楽部のニューズレター

# Salut

［サリュ］
フランス語で救いの意

2002 FEBRUARY
vol.30



「人と人がわかり合うためには、ことばはひとつの手段にすぎないわ。感じるこころが近い方がよっぽど大切」……。21年前、70歳の日本人男性と65歳で結婚した女性のことば。女性は日本語の話せないアメリカの詩人。気持ちが伝われば、ことばの壁はないという。携帯電話やインターネットで私たちのことばのやりとりは忙しい。便利な道具に頼りきり、通じ合いたい相手にことば以前の気持ちを伝えること、忘れがちかもしれない。

新春座談会

# “見えないもの”を実感できるインターフェースとしての活動を

（異なるものの接点）

阪神・淡路大震災から7年が経過し、「地域コミュニティの再生」に向けての取り組みが活発に行われています。他の地域でも、従来の経済性や合理性のみを追求するのではなく、“文化”を基盤に据えた社会の構築を模索する動きが起こっていますが、これらは新しい価値や豊かさを求めようとする人々の、意識の表れだと言えるでしょう。

そういった取り組みの最先端で活動されている方々をお招きし、今春、5周年を迎える寺町倶楽部の今後を、より充実させるヒントを語っていただきました。

（司会・まとめ：川井田祥子）

## 「まちづくり」最前線

――まず、みなさんそれぞれの活動について教えて下さい。

山納●大阪・扇町にあるOMS（*1）のマネージャーとして働くかたわら、2000年4月からは周辺のお店を会場にした「扇町トーキング・アバウト（*2）」を定期的に開いています。

最近では、近くの「シングルズ」というバーを日替わりマスターで運営する、というプロジェクトにも関わっています。

山口●財団法人・大学コンソーシアム京都（*3）が実施している「NPOスクール」（*4）の事務局を担当しています。大学コンソーシアム京都というのは、大学間の単位互換制度など、大学間の連携事業を行うために作られた「京都・大学センター」を母体にして設立されました。大学同士のたし算・ひき算的発想ではなく、各大学の魅力をかけ算やわり算で打ち出しながら学べる仕組みを作り、同時に仕掛けている組織です。

僕は財団設立前から「インターンシップ」についての構想を練る段階に、学生でありながら、もしくは学生ならではの視点で関わりはじめました。「学生が社会にどう関わっていけるか」というのが僕自身のテーマだったし、いまも課題ですね。

弘本●実は、大学では美術の勉強をし、その後、『新住宅』という雑誌の編集の仕事などをしていました。そのときにまちづくり関係の人脈ができて、いまの研究活動につながっているというか、流れついたという感じ（笑）。

「人間が表現するとはどういうことか」という視点を根っこに持ちながら、住まいやまちづくりの研究、大阪市立住まい情報センターなどの事業企画をしています。人はどういうプロセスで成長していくのかとか、人とまちとの関係に興味があって、おふたりの活動にはとても関心があります。

――山納さんや山口さんの、取り組みのきっかけは何だったんですか?

山納●近くのお店の方から「おもしろいことを一緒にやりたい」と相談を受けたのが直接のきっかけですが、



◀扇町トーキング・アバウトでの一コマ「女性が普段読まない男性雑誌について語る会」

(*1) OMS……扇町ミュージアム・スクエアの略。1985年、大阪ガス北支社の移転に伴い、空いた建物で映画館や劇場などを運営。企業のメセナ活動として全国から注目されている。テーマは「関西の若者文化への貢献」と「扇町地区の活性化」。

(*2) 扇町トーキング・アバウト……OMS付近の11店舗を会場に開催されているトークサロン。映画、芝居、哲学など、さまざまなテーマについて参加者が語り合う。テーマは「情報の循環」と「異分野の交流」。







弘本由香里（ひろもと・ゆかり）さん
大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所
客員研究員
①近代能楽集「弱法師」
②胡麻



山口洋典（やまぐち・ひろのり）さん
（財）大学コンソーシアム京都
NPOスクール　事務局次長
①『いつもふたりで』（平凡社）
②カレーライス＋バナナジュース

※①最近、感動した本または映画・演劇・小説な②好きな食べ物

私自身はずっと、「文化を育てるには鑑賞する側も育つ必要がある」と考えていました。

たとえば、劇団が有名かどうかでお客さんの入りが違う、という現状が残念ながらあります。無名の劇団を育てるには、演じる側の努力ももちろんですが、批評できる鑑賞者が増えることと、鑑賞者から批評してもらえる場を作ること、この2つが必要だと考え、トーキング・アバウトをはじめました。

山口●阪神・淡路大震災のとき、ボランティアとして現地へ入ったものの、学生である自分の未熟さを痛感しました。現地では“学生”という匿名の存在ではなく、“山口洋典”という個人が問われます。とても厳しかった反面、学ぶことも非常に多かった。

このことから、学生がまちに出て学ぶ仕組みを作れないかと考え、多くの人の協力によってNPOスクールが立ち上がっていきました。

## 新たな価値の創造

――それぞれ自分の抱えている問題意識をきっかけに、独自のシステムを創って実際に行動を起こされたわけですね。なかなか真似のできることではないと思いますが、おふたりのような取り組みはあちこちで起こっているんでしょうか。

弘本●ええ、いま各地で市民参画型のまちづくりが活発に行われていて、キーワードとしては「地域」と「文化」の2つがあげられます。本来一体のものであるはずの生活と文化と産業を、もう一度生活者の視点で統合しようというものです。

工業社会を支えてきた終身雇用制のような画一的な社会とのつながり方ではなく、一人ひとりがさまざまな社会とのつながり方を模索している状況だと思います。経済の豊かさだけで人生の価値は計れない、と多くの人が気づきはじめているとも言えるでしょう。

山納●トーキング・アバウトやシングルズのもう一つのコンセプトは「もうけない」なんですよ（笑）。経済以外の価値を生み出す、文化のゆりかごのような場になれば、と考えています。

弘本●経済というと、AとBの間で取引が行われ、そこにどれだけのお金やモノが動いたかを数量的に考えることだと捉えられがちですが、実際はその周辺の人やまちに及ぼす質的な影響にこそ意味があります。



質的なインパクトが、人やまち自体が本来もっている創造力や課題解決力を起動させて、もっと別の価値を生み出していくんですね。山納さんや山口さん、そして應典院の活動も、このことを明快に示しているのではないでしょうか。

山口●僕は「地域通貨（*5）おうみ委員会」にも所属しています。「おうみ」は簡単に言えば、「ありがとう」の気持ちを形にしたもので、これを使って地域の人々の自発的な動きが活発になれば、結果として地域が豊かになっていく、元気になると考えています。

こうした取り組みを通じて「まちづくり＝まちを元気にする、おもしろくすること」だと考えています。

(*3) 大学コンソーシアム京都……1998年に設立された京都における大学と地域の連合組織。文部科学省所管の財団法人で、現在は50大学が加盟。

(*4) NPOスクール……ボランティア・NGO・NPO分野の教育・人材育成プログラムの総称で、大学と地域、企業、自治体、NPOなどが連携する新しいシステムとスタイルの事業。この中の「インターンシップ・プログラム“NPOコース”」は、毎年30名前後の学生がNPOやNGOで「就業」し、並行して1年間の「スクーリング」を受講することによって、大学・短期大学の一部の学部では単位認定がなされる。

(*5) 地域通貨……使う用途や目的、流通範囲を限定したお金（のようなもの）。たとえば「おうみ」の場合、「1おうみ＝100円」と換算。労力など各種資源を提供してもらったときに、お礼の気持ちを表すために渡す。換金はできない。



山納　洋（やまのう・ひろし）さん
扇町ミュージアムスクエア
マネージャー
①『存在の耐えられない軽さ』（ミラン・クンデラ著）
②とくになし

## 文化の継承を見据えた取り組みを

――最近、堀江あたり（大阪市西区）が注目されていますね。

山納●堀江は、立花通りという家具屋街を活性化させようと、若者が中心になってフリーマーケットを開いたりして、がんばったのが最初だそうです。

ところが、ある程度にぎわったところに、東京資本のブティックやカフェが進出して地価をつり上げたために、がんばっていた地元の人が外へ出ていってしまった。この現象をどう捉えるか、まちづくりの成功とは何なのかを、改めて考える必要があると思います。

弘本●神戸・北野の異人館街も、いま危うい状況です。震災の影響もありますが、80年代の消費文化的な流れの中で、本来創造的な財であるべきまちの空間が、消費されつくしている観があります。

文化を継承・創造していく形で経済行為を考えなくては、という一つの警鐘です。残念ですが。

山納●アメリカ村が開発されたとき、土地を小分けにして割高にして貸す、ということをしたそうです。坪当たりの売上高を上げるため、苦肉の策として、道にはみ出して商品を並べた。だから、ゴチャゴチャした印象のまちになってしまった。

経済効率だけでまちづくりを考えると、いろいろな面で影響を及ぼしてしまう、という事実はたしかにあるでしょう。

弘本●そういったことを考えると、コンソーシアムの取り組みは、非常にいいモデルケースとして捉えられると思います。人的資源はもちろん、産官をうまく巻き込みながら、継続して実施できる学びのシステムであり、なおかつ、まちを元気にするものになっていますね。

山口●京都の場合は、大学が移転するとたちまち民度が下がる、という危機感がありますから。まちづくりの主体は誰か、誰が何のために進めるのか、を考えることも大切でしょう。

弘本●心の不安定な人が多い現代、心の安定を得る手段として考えられるのは、自然との関わり、歴史や文化にふれること、そして、そういうものを見える形にしてくれる芸術や芸能にふれることでしょう。

歴史的かつ文化的資源の豊富さは京都だけの特権ではなく、應典院の周辺にもあると思うので、それらを上手に取り入れながら、見えないものを見せてくれる活動というか、目には見えない“大切なもの”を感じさせてくれる活動を、繰り広げていってほしいですね。

## 劇場の役割を再生する

――最近、寺町倶楽部の運営委員会で、「應典院という固定の場所にこだわらず、外に出ることも考えては」という意見が出ています。外へ出ることについて、どう思われますか?

弘本●日本の劇場のあり方が語られるとき、「市民社会を創るための役割を、劇場は果たしてこなかった」とよく言われます。

ヨーロッパでは市民が革命を起こして社会を創り上げていきましたが、「どういう社会を創るか」を議論する場が、まちの中の劇場やカフェでした。逆に言えば、「劇場は公共性を育む場であった」とも言えるわけです。そういう歴史が日本にはなく、厳しい言い方をすれば「ただの場所貸し」でしかありません。

いま、その反省に立った動きが出てきていて、應典院やOMSの活動は先駆的なケースだと言えるでしょう。とくにOMSは、議論の場を外に創った、劇場自らが外へ出たということが新鮮でおもしろい、と思っています。應典院も、これから独自の取り組みを展開されることを願っています。

――今日はどうもありがとうございました。



大学コンソーシアム京都・NPOスクールでの講座のようす。





# CLUB TOPICS

大学コンソーシアム京都のNPOスクールから、インターンとして活動を続けていた2名の学生が、1月いっぱいでインターン期間を終えました。

半年間の活動の中で、彼らは何を学んだのか、ふたりからのレポートです。



秋田事務局長を真ん中に、左・松本くん、右・瀧頭さん。

### 「人と人が心の底から語り合える場所を創りたい!」

私が應典院にインターンさせていただいたのはそんな思いからです。どうすればそんな空間が生み出せるのだろう、と常にそう考えながら活動していました。元々アーツに興味をもっていた私は、そのためにアーツが役立つのではないか、という直感を持っていたため、應典院での業務もアーツに関係するものになりました。

私の活動の中心は、NPOとアーツの文化祭といわれる「コモンズフェスタ」の中での「アートプロジェクト」でした。そのプロジェクトは、参加者に自分の大切なモノを持ってきてもらい、それを手のひらの上にのせた状態でそのモノに対しての思いやエピソードを語ってもらいながら、アーティストが写真とビデオを撮影する、というものです。

多くの人が写真とビデオの撮影に参加し、自分の大切なモノ、つまりは自分のもっとも根本にある「自分のこと」について語っていました。その中で、身分や立場の違いも関係なく、自然に人と人の素直な語り合いが生まれていたのです。その光景を目の前で見て、人の心の奥にある、根本的な衝動を形にするアーツというものを通すからこそ、人は心の奥をさらけ出して語り合えるのだと理解することができました。

そして、それは商業化されたアーツではなかなか成しえないことだ、ということが重要です。この場所が、利益優先の商業主義から一歩離れたところだったからこそ、「自発的な個人」が集まったと思うのです。應典院に集まる人の多くは「個人」です。年齢、性別、肩書き、そんなものをすべて抜きにして「個人」として集まるからこそ、自分のことを自ら自由に話すことができるし、誰とでも言葉を交わすことができる。そして、その「個人」の「自発性」を大切にすることが、もっとも大切なことなのだと思います。

「コモンズフェスタ」の運営自体、まずスタッフがその目標とするところを明確にし、企画を立ち上げ、そのコンセプトに応じた専門家やボランティア等を集め、協働してプロジェクトを完成させる、という形をとっていました。関係者はその目標に共感して集まる人ばかりであり、「自発性」を持っています。だから、担当ごとに自由裁量でプロジェクトを進めます。「自発性」を持つ人たちが、自由な発想で組み立てていくから、應典院のプロジェクトはいつも生き生きとしているのだと思います。

人が「自発的な個人」として集まる場所。そんな場所にこそ「心の底からの語り合い」は生まれるのでしょう。また、アーツには人から「自発的な個人」を引き出す力があります。……と、こんな風に自ら考え、行動することが、自分にも「自発的な個人」がいるということになるでしょうか。それをうれしく思えるのも、應典院のおかげです。

今までありがとうございました!

同志社大学4回生　松本要平

### 「少しパワーをもらって帰ることができる」

「寺子屋トーク」や「いのちと出会う会」に参加された方から、頻繁にこんなことばを聴くことができた。應典院に集う人々は生き方、職業、趣味、悩み、問題意識を一人ひとり、十人十色に携えておられる。ここに集う人々は「他者同士」としてお互い自分自身が持っている思いを交換、共有しあう。このとき應典院には集まった人数分の魂が飛び交う、という空間が生まれる。

私自身も他者を「巻き込み」、他者に「巻き込まれる」うちのひとりだった。私にとって應典院で観るもの、聴くもの、ふれるものがすべて新鮮で、私が私自身として生きていくことに欠かせない、スパイス要素としての役割を果たしてくれていることに気づいた。

「寺子屋トーク」や「いのちと出会う会」に参加された方の「パワー」という言葉は「スパイス要素」に相当していて、また、これは他者と関わることで与えられるものなのだと思っていた。しかし何かわりきれないスッキリしないものを感じていた。

今から思えば「市民に開かれた、お寺」でインターン活動をする私の心がいちばん閉ざされていた。しかし心を開くことができた瞬間ならある。「ここに集ってきた人がいう應典院で得られるパワーとは、いったい何なのか」という問いと自問自答していた時であった。

コモンズフェスタ中に應典院寺町倶楽部が主催する事業、アーツプロジェクトに参加させていただいた。自分の宝物を手のひらにのせ、宝物に対しての思い入れを語りながら手にのせた宝物の写真を撮っていただけるといった内容だったのだが、このときの私は自分の担当事業本番を明日に控え、不安と緊張がせめぎ合う中、やりとげたいという気持ちの葛藤だった。奇しくも「このとき」に写真を撮っていただけたのだ。

カメラの前で自分の宝物に対する思い入れを語るうち自信を取り戻していく自分がいた。「明日は絶対いい形で事業を終えることができる」と確信が持てた。私にも人に誇れる生きざまがある、ということを再確認できた。

このとき、ハッと気がついた。「これかもしれない…」應典院に集う人々が少し元気になれる要素の根幹にふれることができた気がした。自分自身で自分の中の気づきに気づいていくことこそが、自分の力になるということ。元気のスパイスは、人から与えられたり應典院から与えられるものでもなく、自分の中にある。自分の中の気づきに気づいていくこと。気づきに気づいていこうとする人の背中を押す場作り。

この場作りを行っているのが應典院なのである。

佛教大学3回生　瀧頭友未

# 恒例の第6回なにわ人形芝居フェス 4月7日に盛大に開催!!



お馴染みの「なにわ人形芝居フェスティバル」が、今年も下寺町の寺院を舞台に、花祭り前日の4月7日（日）に開催されます（写真は前回の模様）。

今年、とくに注目されるのが子ども花祭り行列。お釈迦さまの誕生を祝って、総勢50名の子どもたちが掛け声とともに巨大な白象を曳いて、寺町を練り歩くという企画です。参加の子どもたちを募集していますので、ふるってご参加ください（参加費無料・申込は人形フェス事務局）。



その他にも、人形劇はもちろん、花嫁行列や路上パフォーマンス、てらまち自然・歴史ウォーキングなど、各種催しでにぎわいます。

入場にはフリーパスのバッジが必要となります（1個500円）。詳細は同封チラシをご参照ください。

◆日時
4月7日（日）
午前10時～午後4時
◆開催場所
天王寺区下寺町・
逢坂界隈
◆問い合わせ
なにわ人形芝居フェス
運営委員会事務局
TEL06－6774－2877

## Make up Community
コミュニティな人々

ゲスト：上田假奈代さん

**コモンズフェスタのオープニングでは、上田假奈代さん、デカルコマリィさん、奥田扇久さんのコラボレーションが印象的でした。中でも詩人・上田さんの独特の世界は、詩の持つ魅力をあらためて感じさせてくれました。**

**4月から、應典院で月2回のペースで「詩の学校」を開催される、上田假奈代さんにお話を伺いました。**



私が應典院と出会ったのは、ちょうど應典院の落慶イベントの橋口譲二さん写真展の時。第一印象は、「変わったギャラリーだな」という感じ。実は、ここがお寺だということは、後から知ったんです（笑）。

その後、橋口さんのトークライブをお手伝いしたり、この間のコモンズフェスタのオープニングに参加したり、その度ごとに、應典院という場の持つ力を感じていました。

今年の4月から、毎月2回「詩の学校」を始めます。そのつもりになったのも、やはり應典院という場と出会ったからかな。

私は、ことばというのは、人生の光のようなものだと考えています。何気なく見た車内づりのことば、友人からのメールに励まされたり……。ことばの持つ力は計り知れないものです。

ことばは「ことのはし」と、ある著名な方が言っておられましたが、まさしく自分の中の意味するものと、しないものの境界までを、私たちはことばで表現しているんだと思います。つまり、そこには自分自身の生き方や価値観が、表れているんだと思います。

4月から始める詩の学校では、詩人を育てようというものではありません。参加された方が、ことばや声に意識を傾け、自分の人生を見つめる場になれば、と思っています。

今の社会の中では、誰しもがその流れについていくことでたいへん。どんどん時代の流れに飲み込まれてしまう危険すら感じます。だから、意識的に自分の意識をくっきりさせる時間が必要なんです。應典院という場は、その時間を過ごすには理想的な場所だと思うんです。

私は、詩人というのは、ことばを誰かに伝え、届けるのが役目だと思っています。つまり、詩を通じて社会とつながり、コミュニケートしていく……。

詩の学校で、どのような人と出会えるのか、今からたのしみにしています。





# 秋田住職発 應典院掲示板

1月18・19両日、應典院のスタッフの合宿研修を行いました。5周年を控え、應典院のいまとこれからについて、スタッフ同士が熱心に話し合いました。

これまでの5年間、よくも悪くも住職のパーソナリティが目立ちましたが、今年を節目にそろそろ「スタッフの應典院」に移行していこうと考えています。多くの活動を通して個々のスタッフも自分の役割に気づき、責任ある仕事を担うよう育ってきました。これまで、本当にすばらしい人材と出会いをいただきました。それをスタッフにとっての人間関係として成熟させながら、應典院の機動力を向上させていければ、と思っています。

今年は、ぼくの本寺・大蓮寺の晋山もあり、内に外に大きな転換の一年となりそうです。新体制は、4月1日からスタートです。（彦）

### ■自分感謝祭、年末を彩る。

5回目となる自分感謝祭が、12月26日開催、昼・夜合わせて約30名の方々の参詣がありました。この一年をふりかえり、自分自身に懺悔と感謝を振り向けるオリジナル法要。藤田礼子さんのオルガン演奏と星野貴江さんの照明が、ぐんと場の雰囲気を彩りました。

とくに夜の会では、終了後、ロビーで年忘れ交流会を開催、ささやかなおつまみを持ち寄って、みんなで楽しく一年をしめくくりました。



### ■大商の都市活性化委員会のWG

最近、都市計画の仕事が多くなりましたが、このたび大阪商工会議所から依頼を受け、「大阪都市活性化委員会ワーキンググループ委員」に就任、1月7日に1回目の会合がありました。

地盤沈下と言われる大阪の都心をもっと元気のある街にしようという目的で、1年半をかけて委員同士の議論から具体的なプロジェクトを構築していくもの。30代から40代の若手委員は、ゼネコン、メディア、企業シンクタンクなど多士済々の顔ぶれで、委員長を近畿大学の久隆浩助教授が務めています。まぁ、何ができるか分かりませんが、現場の風を吹き込めるようがんばります。

### ■スタッフ研修で1泊2日

去る1月18・19の両日、琵琶湖で初めて合宿形式のスタッフ研修を行いました。参加は、インターン2名を含め計7名。現状の問題点を引き出しながら、事業面、人材面などをどのように改善していくのか、スタッフ同士小グループに分かれて、熱心に語り合いました。



2002年度は内に外に大きな転換の年。心機一転のスタートに向けて、建設的な研修となりました。

### ■お墓の未来を語るシンポジウム

来る3月3日、東京・子どもの城で「個の尊重　死後の自立～21世紀の創造的葬送を考える」（主催・エンディングセンター）が開催、日蓮宗妙光寺の小川英爾さんらとシンポジストの一人として参加します。

去年あたりから交流の始まった葬送の市民活動ですが、今回は家族の血縁だけではない、結縁＝ネットワークづくりについて議論が交わされます。現在製作中のインターネット「いのちクラブドットコム」も、当日会場で投影の予定です。基調講演は、東京大学の上野千鶴子教授。

お申込みは、03－3302－9219まで。

## KYOTO寺子屋フォーラム2001

昨年12月9日に、大学コンソーシアム京都のキャンパスプラザで、「KYOTO寺子屋フォーラム2001」を開催、僧侶や学生など150名が参加しました。主催は全国青少年教化協議会とアーユス関西ほかで、その一員として、私が全体のプロデュースを担当しました。

これは社会資源としてのお寺の可能性に着目して、コミュニティ再生の拠点としようとする試みの一歩。東工大の上田紀行助教授の基調講演のあと、應典院をはじめ社会活動を推進するお寺の映像紹介、最後に上田さん、神宮寺の高橋卓志さん、COML の辻本好子さんらによるトークセッションが繰り広げられました。いのちの実践を育む場として、お寺とNPOの共通項に改めて気づかされました。

今後は、大学コンソーシアム京都とも連携しながら、寺子屋NPOをコンセプトに、京都市内のお寺とNPOが協働できる場を提案していく予定です。

